

世界の多様性を実感する

—筑波大学のロシア語圏留学のすすめ—

筑波大学人文社会系准教授／海外拠点中央アジア事務所長 白山 利信

USUYAMA Toshinobu

1. はじめに

グローバルゼーションという言葉が社会に定着して久しい。ヒト・モノ・お金・情報などが国を超えて地球規模で行き交うグローバルゼーションは、20世紀末に起きた東欧革命とソ連崩壊による東西冷戦の終結によって加速化された現象である。グローバルゼーションのメリットは、あらゆる物事の世界基準化志向による効率性の格段の向上である。デメリットは、効率化の反面、強制力を伴って進行する、物事の単一化傾向である。この単一化は、グローバルスタンダード化と表裏一体だが、時として特定の価値観の独善性を助長し、多様な価値観を排除する力が働く。したがって、グローバルゼーションの深化は、世界の多様性の尊重を同時に追求するものでなければならない。

外国語教育についても、国際共通語としての地位を固めた英語教育を強化し、推進する政策は無論必要であるが、英語以外の外国語教育の重要性にも十分配慮しなければならない。世界には、6,000とも8,000とも言われる数の言語が存在し、その数に匹敵するだけの多種多様な文化が広がっている。英語だけで事足りる領域というのは、むしろ非常に限られているのである。

大学の国際化という側面も同様に、例えば、学生の派遣先を英語圏の大学だけに限定するというのは、世界の多様性の尊重に反する偏ったあり方で、正しい方向とは言いがたい。故に、英語圏と非英語圏の双方の大学に学生を派遣することが望ましいあり方だと信じる。

2. 時代と社会が求めるグローバル人材とは？

国や組織・社会の栄枯盛衰は、いつの時代にあっても必然的な現象である。高度経済成長期を終え、経済的繁栄を極めた日本は、すでに社会の成熟期に入っている。そして、大量生産・大量消費・大量廃棄という経済至上主義の価値観から少子高齢化社会に適した持続可能社会という循環型のしくみを重視する価値観へと社会のあり方を変えつつある。一方、エネルギー自給率も食料自給率も非常に低い、少資源国である日本にとって、国際的に活動するグローバル人材の育成・輩出は死活問題である。

では、グローバル人材に求められる資質とは何か。それは、国であれ、企業であれ、大学であれ、個人であれ、国際社会の中で時として利害と価値観が激しく衝突する中

で、自らの実力と人格、そして鍛え上げられた交渉力によって過酷な競争を乗り越え、自己（国・組織・個人）の権益を最大限確保する、しかしそれでも周囲の信頼を失わないという人材総体の底力ではないかと思われる。それ故に、文化と価値観の多様性を尊重し、受容する柔軟な感性と、不透明性の色濃い時代と社会の中で、自らのビジョンと行動によって創造的に問題を解決していける総合的な力を備えた人材を養成し続けることが大切になる。

その意味で、日本社会とは全く異なる多様な価値観を実体験し、何かと不自由な異郷の地に身を置いて勉学に励む海外留学は、日本の若者を逞しいグローバル人材に育て上げる契機となる最良の教育環境であると考えられる。

拙稿では、筑波大学と、非英語圏の一つであるロシア語圏諸国の大学との交流とそれらの大学への留学状況について紹介し、その魅力と意義について考察したい。

3. ロシア語の実用的価値とは？

1991年のソ連崩壊後、その領土と国家資産の大半を継承したロシア連邦を筆頭に、全部で15の新しい国が誕生した。具体的には、ロシア、ウクライナ、ベラルーシの東スラヴ諸国、リトアニア、ラトヴィア、エストニアのバルト諸国、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンの中央アジア諸国、グルジア、アルメニア、アゼルバイジャンのコーカサス諸国、そしてルーマニアとの親近性が極めて高いモルドヴァである。

表1 旧ソ連から誕生した国家における主な宗教・言語・民族

	国名	基幹民族	言語(国家語, 公用語)	主要宗教
1	ロシア	ロシア人(80%以上)	ロシア語	キリスト教(ロシア正教)
2	ウクライナ	ウクライナ人(70%以上)	ウクライナ語	キリスト教(ウクライナ正教, ウクライナ・カトリック教, ロシア正教)
3	ベラルーシ	ベラルーシ人(75%以上)	ベラルーシ語, ロシア語	キリスト教(ロシア正教)
4	リトアニア	リトアニア人(80%以上)	リトアニア語	キリスト教(カトリック)
5	ラトヴィア	ラトヴィア人(約60%)	ラトヴィア語	キリスト教(カトリック, プロテスタント・ルター派)
6	エストニア	エストニア人(約70%)	エストニア語	キリスト教(プロテスタント・ルター派)
7	ウズベキスタン	ウズベク人(約80%)	ウズベク語	イスラム教(スンニー派)
8	カザフスタン	カザフ人(約60%)	カザフ語, ロシア語	イスラム教(スンニー派)
9	キルギス	キルギス人(60%以上)	キルギス語, ロシア語	イスラム教(スンニー派)
10	タジキスタン	タジク人(約80%)	タジク語	イスラム教(スンニー派)
11	トルクメニスタン	トルクメン人(80%以上)	トルクメン語	イスラム教(スンニー派)
12	グルジア	グルジア人(70%以上)	グルジア語	キリスト教(グルジア正教)
13	アルメニア	アルメニア人(90%以上)	アルメニア語	キリスト教(アルメニア正教)
14	アゼルバイジャン	アゼルバイジャン人(90%以上)	アゼルバイジャン語	イスラム教(シーア派)
15	モルドヴァ	モルドヴァ人(60%以上)	モルドヴァ語(ルーマニア語)	キリスト教(正教)

表1のように、これらの国々は、民族、言語、宗教などを互いに異にする多様性豊かな社会空間である。ここでは、ソ連時代を通じて、ロシア語が100以上の様々な諸民族の間のコミュニケーションを可能にする共通語としての役割を果たしていたことから、各新生国家において基幹民族語が国家語として公用語になった現在でもロシア語の汎用性は非常に高い。特にソヴィエト時代に教育を受けた40代より上の世代においてロシア語の運用能力が高くなっている。筆者は、旧ソ連地域に新たに生まれた15

の国々はソ連解体から20年経過した今でもロシア語が通用する言語空間であり、ソ連時代に育まれた共通の価値観がある程度残された文化空間であると考えており、この言語文化圏をロシア語圏（ルソフォニー-russophonie）と呼んでいる¹。WHOによる世界の人口統計データでは、2010年現在の上記15カ国、すなわち、ロシア語圏諸国の人口総計は285,849,000人であり、約3億人規模となっている。ロシア語さえできれば、ロシア語圏諸国で十分活動できることを考えると、ロシア語の実用的価値がいかに大きいか分かる。

4. 筑波大学とロシア語圏諸国との教育交流

表2 筑波大学とロシア語圏の大学との学術交流協定締結の現状

	国名	大学名	締結年月	協定に基づく交換人数枠 (短期留学/3~12ヵ月)	交換学生の 派遣実績	交換学生の 受入実績
1	ロシア	サンクトペテルブルク国立大学	2002.02	2	27	16
2	ロシア	モスクワ市立教育大学	2009.05	5	13	14
3	ウクライナ	キエフ国立大学	2006.09	5	10	20
4	ベラルーシ	ベラルーシ国立大学	2012.02	5	1	0
5	エストニア	タリン国立大学	2006.01	5	12	5
6	ラトヴィア	ラトヴィア国立大学	2006.01	5	3	10
7	リトアニア	ヴィリニウス国立大学	2006.12	5	4	8
8	ウズベキスタン	タシケント国立東洋学大学	2005.05	5	10	45
9	ウズベキスタン	世界経済外交大学	2006.09	5	0	10
10	ウズベキスタン	サマルカンド国立外国語大学	2006.09	5	0	15
11	カザフスタン	ユーラシア国立大学	2006.08	5	2	22
12	カザフスタン	カザフ国立大学	2007.01	10	4	36
13	カザフスタン	カザフ経済大学	2007.10	5	0	9
14	キルギス	キルギス国立大学	2005.05	5	3	34
15	タジキスタン	ロシア・タジク・スラヴ大学	2007.09	5	2	10
				計	91	254

筑波大学は、日本や欧米などの西側諸国にとってソ連邦という政治的・外交的に長い間閉ざされていた空間がソ連解体と新生諸国の誕生によって広く世界に開かれた空間になったこと、すなわち、ある意味でロシア語圏諸国そのものがあらゆる分野において新たに取り組むべき研究フロンティアになったことを受けて、人文社会系の教員を中心に、表2に示されているように、2001年度以降、ロシア語圏諸国の有力大学との教育交流の拡大・強化を戦略的に押し進めた²。その結果、毎年10名程度の学生がロシア語圏の協定大学に交換留学するまでになった³。

一般にロシア語圏への留学は学生たちにはマイナーだと思われがちであるが、本学

¹ フランス語話者 francophone から成る言語共同体を意味する「フランコフォニー francophonie（フランス語圏）」をヒントに造語した用語で、ロシア語話者 russophone から構成される言語共同体を示している。

² 一方、(日本研究の長い歴史を持つロシアを除く) 新生ロシア語圏諸国では、日本の伝統文化やテクノロジーへの関心などから、数多くの大学において次々と日本語教育が導入され、本格的な日本研究が始まった結果、日本留学の需要が大きく高まった。こうした事情などを背景に、本学は、2007年6月にウズベキスタン共和国タシケント市に海外拠点「筑波大学中央アジア事務所」を開設し、(ロシアやウクライナなどのその他のロシア語圏も射程に入れながら) 中央アジア諸国の大学・研究機関との教育・研究ネットワーク構築を加速させた。

³ また、本学外国語センターは協定大学のサンクトペテルブルク国立大学文学部と連携し、毎年8月に3週間程度の夏期ロシア語研修を実施している。この語学研修をきっかけとしてロシア語圏へ留学する学生も多い。ちなみに当該研修は、自由科目(特設)「ロシア語」(2単位)として単位認定されるしくみになっている。

では学部のロシア語履修者数も常時延べ200名を優に超えるまでになり、ロシア語圏の協定大学への交換留学に対する関心も年々高まっている⁴。筆者は、これまでに連絡調整教員として、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタンの協定大学に60名を超える日本人学生を派遣した。



ロシア連邦サンクトペテルブルグ国立大学留学中の様子

5. ロシア語圏諸国に留学するメリットとは？

では、ロシア語圏にあえて留学するメリットとは一体何か？どこに魅力があるのだろうか？

ロシア語圏に留学した学生たちとの交流を通じて日頃から強く感じているメリットは、次の6つである。

①他人とはひと味異なる研究・学習活動ができる

卒業研究にしても修士論文の研究や博士論文の研究にしても、ソ連崩壊後のロシア語圏諸国に関する研究そのものが日本国内で稀少であり、先行研究も相対的に手薄なため、オリジナリティー豊かな研究活動に繋がるケースが比較的多い。例えば、筆者は、ベラルーシにおける危機言語としてのベラルーシ語の現状と課題について研究している院生を指導しているが、筆者の知る限り、現在この研究テーマに専門的に取り組んでいる研究者は日本国内では当該学生ただ一人である。つまり、本気で深く研究すれば、国内の第一人者になれるようなテーマが満ち溢れているのである。

②ロシア語の運用能力を伸ばせる

派遣学生たちは留学する前にロシア語圏諸国での汎用性が高いロシア語を筑波大学で最低1年から2年間学習しており、受入大学のネイティブ教員による充実したロシア語教育を通じて、ロシア語運用能力を飛躍的に高めることができ、ロシア語を自身の研究で直接的に活かせる語学力を身につけられる。またロシア語は就職面で強力な

⁴ 筑波大学は、2009年に文部科学省のG30プロジェクト（大学の国際化拠点整備事業）の採択を受け、学部・大学院の英語プログラムの拡充、奨学金制度の創設、チューター制度の充実、留学生寮の整備、国際学生フォーラムの開催など、各研究教育組織や国際部（国際企画課、留学生センター、海外事務所）などがそれぞれ懸命に留学生受入拡大に努めてきた。現在では約2,000名の留学生を受入れるまでになった。将来的には、この数を4,500名にまで増やし、学生の4人に1人が留学生という構成にする計画があり、キャンパス内の日常の国際化が進行している。こうした背景の中でロシア語圏諸国からの留学生も確実に増えており、身近にロシア語を話す留学生がいるという環境が日本人学生たちのロシア語圏留学に対する関心を高めているように感じられる。2012年5月1日現在のロシア語圏諸国出身の留学生数は、64人である。

武器になる。

③英語の運用能力を伸ばせる

非英語圏に留学すると英語力を伸ばすことができないというイメージがあるが、それは必ずしも正しい見解とは言えない。現地の名門大学である協定締結校の研究者・教員・学生は相対的に英語能力が高く、教授言語が英語である授業を履修した場合、英語による学術的なコミュニケーションが要求される場面も多々あり、特にある程度の英語能力を備えている院生の場合、研究者としてのディスカッション能力と英語運用能力の双方を高めることができる。

④公用語としての現地語（国家語）の運用能力を伸ばせる

派遣学生たちは英語とロシア語の運用能力の向上に加えて、基幹民族語である、公用語としての現地語（ウクライナ語、ベラルーシ語、エストニア語、ラトヴィア語、リトアニア語、カザフ語、ウズベク語、キルギス語、タジク語など）を同時に学習でき、マルチリンガル・マルチカルチュラルな能力を伸ばすことができる。これまでにウクライナや中央アジアに留学した一部の本学学生たちはロシア語と現地語を同時に習得し、卒業論文・修士論文・博士論文で英語・ロシア語・現地語の3言語を駆使した、優れた研究成果を挙げた⁵。

⑤異文化世界を生き抜くための総合的な力を涵養できる

ロシア語・英語・現地語の運用力の鍛錬とロシア語圏という外地での不便な学生生活（気候、食事、住環境、習慣や文化の違いなど）を通して、異文化空間で世界の中の日本という視点に立って逞しく生活し、良い意味で多様性を肯定的に受容する感性と創造的問題解決能力を備えた真のプロフェッショナルとして将来活躍するための素養を育むことができると思われる。欧米などと比べるとロシア語圏の日本人留学生の数は非常に少ない。日本人や日本語に頼れる環境はほとんどないと言ってよい。そのため、否応無しに強い自律性と行動力が求められる。不断の緊張感の中で、多様で複雑なロシア語圏社会にうまく適応しながら、不便な留学生生活を全うすることで、精神力が鍛え上げられ、世界のどの場所でも生きていけるといふ何物にも代え難い、強い自信が生まれるのである。

⑥留学生活で身につけた語学力と精神的逞しさが就職活動のための武器になる

超氷河期と言われる厳しい就職戦線において、本学のロシア語圏留学者の就職状況は全体的に非常に良好である。これは、急速に経済発展しているロシア語圏への日本企業の進出に伴う貿易活動の活発化が最大の要因であると思われる。いずれの場合も学生たちは、（総合的な実力を前提として）留学生活で身につけた語学力と精神的逞しさを評価され、ロシア語圏での活躍を会社から期待されて入社したことが判明している。筆者がロシア語を教え、ロシア語圏の協定大学に送り出した学生たちがこれまでに就職した企業等を具体的に列挙すると、三菱商事、日本紙パルプ商事、日ソ貿易、

⁵ 現地語（国家語）の社会的位置づけがますます高くなっており、（ロシアを除く）ロシア語圏諸国においてロシア語だけで掘り下げた研究を遂行することは困難であり、ロシア語と現地語の双方の習得がすでに事実上必要不可欠となっている。

三菱自動車、マツダ、富士重工業、パナソニックなどである。ちなみに、ロシア語圏に交換留学した今年度卒業予定の学生は、丸紅、東京貿易、日立工機、JICAなどに内定している。

以上、6つのメリットを挙げたが、この他にも留学中に築いた人間関係が人脈として将来国際的ネットワークの中で活かされることなどもあるかもしれない。

6. むすびにかえて

世界は多様性の宝庫である。また世界は変化の連続であり、複雑さと不透明さを常に内包している。人も組織もその多様性と複雑な関係性の中でいかに共存・共栄を図っていくかが問われている。まさしく自律的にそして創造的にあらゆる難題を乗り越えていく力が求められる時代になっている。その意味で、学生たちの多くがあまり馴染みのない非英語圏へ留学すること、例えば、民族的にも言語的にも宗教的にもまた文化的にも非常に多様でユニークなロシア語圏に留学することは、不透明な時代と社会を力強く生き抜くための自身の内発的な力を覚醒させ、困難な状況の中で自らビジョンを打ち出しながら、道なき道を切り拓くチャレンジ精神と忍耐力を育てる絶好の機会となるのである⁶。

参考文献

- 1) 臼山利信：「大学間交流とロシア語教育—筑波大学の取り組みを事例として—」『スラヴィアーナ』Vol. 22, 東京外国語大学スラブ系言語・文化研究会, 5-20頁, 2007.
- 2) 『世界のロシア語 2003』中澤英彦・臼山利信訳編, ロシア連邦外務省報告書, 下巻, 東京外国語大学語学研究所・筑波大学外国語センター, i-iv頁, 1-248頁, 2007.
- 3) 『世界のロシア語 2003』中澤英彦・臼山利信訳編, ロシア連邦外務省報告書, 上巻, 第二版, 東京外国語大学語学研究所・筑波大学外国語センター, i-iv頁, 1-186頁, 2008.

⁶ 筑波大学は、平成24年度グローバル人材育成推進事業（特色型）において、「地域研究イノベーション学位プログラム（ローカル最適なグローバル人材の育成）」（人文・文化学群、社会・国際学群、人文社会科学部国際地域研究専攻）が採択された。筆者は、中央アジア地域研究分野の人材育成と当該プログラムの活動を連動させながら、ロシア語圏諸国への留学をさらに後押ししていきたいと考えている。